第十七号

ねこみみの

猫蓑通信

平成六年
（１９９４）
十月十五日発行
〔年四回発行〕

発行人　東 明雅
発行所　柏市つくしが丘２－２－１２東 明雅 方
Ｔｅｌ．０４７１－７５－１１９２

「連句入門」異聞

東　明雅

九月三日の第六回全国連句新庄大会の会場で、見知らぬ人から声をかけられた。

「私は先生の『連句入門』ばかりを頼りに連句をはじめ、お蔭でこの大会で入選しました。一言お礼申し上げたくて」とその人は言う。見ればまだ若々しい壮年の男性の方であった。

従来もあの本だけを頼りに、いわば連句を独学した人は多いようで、私も時折りそのような人に接したが、今度のように、それで入選できる程まで力を付け得た人は極めて珍らしい。

夜半亭几董は蕪村門の逸材であるが、彼の名著と言われる『付合てびき蔓』の序文で次のように書いている。「俳諧の書、いにしへより少なからずといへども、付合の意味など、ことに書籍のうへにてはわきまへがたき事多し。されば堪能の人に会し、席を重ねて議論を聞、まどひをとき、而して後自得・勘破し、はじめて俳諧を知べき也。されど不幸にして口受すべき人を得ざれば、自己の誤を正すの便りなく、却而他の僻論・惑説を聞て、病を伝るの失有。あはれよき師をえらび、口づから受得て修行を専とし、自然と発明するの外はあらじかし・・・」

私も先師芦丈先生から全く同じことを教えられた。それで、『連句入門』を執筆している時も、これがすぐ実作に大きな効果を上げるとは実は考えていなかった。

明治以来、文芸の世界の片隅に追いやられ、滅亡寸前になった連句が、漸く子規・虚子の呪縛から解放されようとしたのが昭和四十五年頃であるから、私があの本を書いた昭和五十三年は、まだまだ連句に対する誤解・偏見がみちみちていたのである。

私はまずこの謂れのない連句に対する誤解・偏見を取り除き、世間の人に連句というものは、どのような文芸であるかを知って貰いたかったのである。

それで、全編を五章に分け、第一章に連句（俳諧）を芸術的に完成した芭蕉の紹介、第二章歌仙の構成、第三章式目、そして第四章に連句のメカニズムとしての付けと転じを説明し、最後の第五章に芭蕉の作品「冬の日」を紹介して、連句の芸術性の説明をした。面倒だと考えられていたものを、一応整理して、ともかく連句とはこういうものだと芸術としての全貌が分かっていただけたのではあるまいか。

もし、この本を実作により役立たせるためならば、付け、あるいは転じ、ことに転じの中心となる自他場の説について、もっとくわしく述べるべきであったし、私も実は述べたかった。しかし、あの当時としては、あまり細かなこと、また新しいことを述べると、一層初心者をまどわせ、連句離れをおこしかねないので、心ならずも割愛した次第であったが、心あり、才能ある人は、これでも十分連句の真髄を会得されるという証明が出来たこと、私は大変うれしかった。

地球はまるかった

中川　凡

猛暑の日本を遠く離れ、各地での交流を目的とする船に乗り、地球をぐるりとひと周りしてきました。

寄港した国々、どこへ行っても驚かされたのが、不思議な日本語の普及？です。各国の公用語の中の最低限必要そうな挨拶や用語を、カンニングペーパーに書き下船する我々を待っているのは、日本人目当てに商売しようという人達の「こんぬちは」やら「あるがとぅ」「ＮＯ高い」という怪しい発音の日本語達。金持ち日本人の財布を開かせるためとはいえ、その普及率の高さには、苦々しく思いながらも感心してしまいます。そして、いざ買い物をしようとしてからがまた大変。今の日本では、値切り交渉などした事のない人が多いためか、平気でふっかけてくるからです。

ケニアでのお店でのこと。値段交渉には筆談が一番と、メモ代りに手帳に挟んでいた紙切れの短冊を差し出すと、主人は端に思った通り高めの値を書きました。負けじと逆の端にに値を書くと、その部分をビリッと破り「ＮＯ」と言いはってきたのです。こちらもと、相手の値を破り再び提示。これが何度か続き、お互い小さくなった紙切れに、より小さな字で書こうとやっているうちに、遊んでいるようになってしまい、どちらともなく笑い出してしまいました。不思議な事に、気心が知れたというのか、気がつけば、そのオヤジと奥さんと二人の子供と記念写真まで撮っていました。

ちなみに、その買い物は、それなりに安くなりましたが、他にも多数の短冊を使いあれこれ買ってしまい、結局まんまとやられたのかもしれません。

短冊をそんな使い方するんじゃありません！とお叱りを受けるかもしれませんが、その後ケニアでは、日本人に対しての値段交渉がこの方法で行われている・・・・という噂は、今のところ聞いておりません。

日独俳句大会に参加して

市野沢　弘子

九月十六日の朝、夏服のまま、フランクフルト空港に降り立つと、そこはもう十二月初めの寒さであった。街を行く人々は、暖かそうな長いコートや、皮のブルゾンに身を包み、街路樹のプラタナスの葉が時々風に舞う。初めて自分が異邦人であることに気がつき、さらに地球の広さも思い知らされたのであった。

フランクフルトの街をバスでしばらく行くと、湖のようなものが見えて来た。それがライン川であると知った時の驚きは、時差ボケなどどこかへ飛んで行ってしまう程のショックであった。日本の川に比べてなんと言う水量の豊かさ。そして広い広い川幅。様々な遊覧船が行き交い、様々な貨物船が行き交う。川の両岸には鉄道が走っているけれども、ライン川は昔と変らずに、川の交通機関としての役割を、今も果しているのであった。

ケルン大聖堂前の「ドムホテル」に一泊。いよいよ「日独俳句大会」の一日目を迎える。ケルンの中心部よりバスで十分ほど行くと、閑静な緑の中に「日本文化会館」があり、目の前には広い池が展け、その廻りに菩提樹の並木道が続く。どれも立派な菩提樹の幹で、葉の緑と、薄茶色の実とのコントラストが印象的であった。

日本側からは、「俳人協会」より三十一名、「現代俳句協会」より三十名。ドイツ側からは三十八名の出席。挨拶の後、「現代俳句協会」を代表して、夏石番矢氏の講演があり、その後でディスカッションが行われた。続いてドイツ側から、シュナイダー教授の講演が行われ、俳句における「季語」の難しさについて語られた。伝統的な季語の言葉の代りに、別の言葉が使われていることに対して、多くのドイツの俳人は疑問と戸惑いを感じているということであった。自然（季節）を詠んだものではなく、「敗戦日」「終戦日」等で、終戦よりすでに五十年近く経っているのにもかかわらず、「敗戦日」「終戦日」を季語として使った俳句を作っていることが、理解できないということであった。俳句は抒情詩（自然を詠んだもの）という解釈からはみ出した俳句に、初めて出会った時、それはとりもなおさず、文化の違い、国民性の違いに出会ったということになるのであろうか。活発なディスカッションの後、「街の生活」と題した、フランクフルト俳句サークルの人達十二名による「連歌」が行われた。連歌といっても、座って一巻を巻く分ではなく、十二名の方が前に出て立ち並び、代る代る自分の句を詠い上げる。まるで歌い上げる様に、表情たっぷりに。私には予期せぬ驚きであった。二日後、「俳人協会」を代表して渡辺勝氏の講演があり、ディスカッションの後、ドイツのベルトナー教授の講演が行われた。一日目と同様、ドイツ語の講演（切れの良い所で切る）に対して日本人による通訳が行われ、それが繰り返される。ベルトナー教授は、「松尾芭蕉、この難しきもの」という題では、芭蕉の考えを伝えるために、ドイツ文学の優れた作家達と比較をして話を進められた。芭蕉の詩論を様々な角度から分析し、証明される姿に、教えられることが多く、ドイツへ来て、芭蕉を最確認するというより、勉強になったというのが本音である。又、ベルトナー教授は、芭蕉の「奥の細道」その他の古典の翻訳の必要性を特に強調された。俳句はこれからも、外国人にとって、「誤解にもとづく理解」を繰り返しながら、少しづつその国の詩になっていくものなのであろうか。

＊たけくらべ＊

連句の席で夢中になって句を作っていると、苦心の付が「たけくらべです」と返句になり、頭を掻いた経験のある人は少なくないのではないでしょうか。

「たけくらべ」とは、長句で付けなければいけないところを短句で出し、短句で付けるところを長句で出してしまうこと。捌きはそれが面白い句だった時は、たけくらべであっても、「これを長句にしたらどうでしょう」、「これ短句にして下さい」などと言ってくれます。

ではこの「たけくらべ」を逆手に、長句短句の作り替えを遊んでみたらどうでしょう。何人かの方にお願いしてみました。出題は芭蕉連句より。

①　舌のまはらぬ狐やや寒
　一すじも青き葉のなき薄原
　（「けふばかり」の巻）

やや寒の狐稚く鳴きをりて
　ただ茫々と白き芒野
　（瑞枝）

やや寒に舌のまはらぬ狐ゐて
　青き葉のなき薄原なり
　（久美子）

舌のまだまはらぬ狐やや寒く
　青き葉を見ず穂薄の原
　（孝子）

うそ寒のまだ舌足らずなりこん狐
　ただ白々と靡く薄野
　（利子）

やや寒し舌のまはらぬ狐ゐて
　芦屋道満穂薄の原
　（和弥）

②　見ぬふりの主人に恋をしられけり
　すがた半分かくす傘（からかさ）
　（「打ちよりて」の巻）

秘めたる恋に主人見ぬふり
　からかさを傾げてかはす人の波
　（好敏）

見ても見ぬふり妻の色事
　傘を斜にかくすふたり連れ
　（千町）

そしらぬ顔で主見てをり
　上半身傘に隠して通り過ぐ
　（央子）

原句の味わいを損わぬよう、面白く長短が入れ替わりました。これが即座に転換出来ましたら、「たけくらべ」も慌てないですみますね。
（編集部）

書籍案内

『猫蓑庵発句集』東明雅　著
永田書房刊　２０００円

◎『猫蓑作品集Ｖ』の掲載作品の締切は十一月末です。
〒一一七七　柏市加賀２－１２－１１
梅田　利子　宛

炎昼の巻　東　明雅　捌

炎昼の庵に集ふも縁かな　明雅
白き扇のやすむ間もなし　健
ダイビング蝶々魚に手を触れて　孝子
リボンをつけた犬とお散歩　守男
木星にあたる星屑月はるか　昌子
夕顔の実をかけし軒先　孝
ウ盆狂言同級生は女形　同
甘えんぼうのくせに薄情　雅
職退きてバイオリズムの狂ひけり　昌
独裁者出て対話途切れる　男
禿鷲は千仞の谷睥睨し　孝
泥棒酒に酔ひし寒月　雅
オーソレミオ伊太利人になりきって　孝
TV・CD天下泰平　健
一億は核の脅威も知らぬげに　雅
お礼参りは果つる時なし　昌
制服の襟に舞ひこむ花ふぶき　健
春の虹立つ故郷の山　男
ナ炉を塞ぐ無村の軸を掛けかへて　孝
真打を待つ寄席の座布団　男
羅の人横にゐて嫋やかに　健
ゲランの香り残す幽霊　孝
乱歩賞取ってこのごろいい気持　昌
和牛網焼きひと口に食ふ　同
ジンタ来て木枯すさぶ北の町　健
誓文払ひに急ぐ人波　同
新発意を金曜ごとに待ち合はせ　男
三回忌まで貞淑な妻　昌
針葉樹すっくと立てり後の月　孝
サナトリウムに響く啄木鳥　同
ナウ秋巡業綱の望みを来場所に　男
地場産業の絣織る母　孝
電話口訛なつかし友の声　健
雪どけ水の迸るなり　男
夢のごと花の真盛り滝桜　雅
蜂の巣箱を運びゆく人　健

首尾　平成六年七月二十日
於　深川芭蕉記念館

更衣の巻　穴澤　篤子

みづうみにひかりふりけり更衣　篤子
とうすみとんぼ乗りしそよ風　健悟
湯引鰻そへしみどりのあざやかに　淳子
小路歩けば洩るる三味の音　治子
月明り本の話もすこしして　文子
木の実をにぎる掌を抱きあげ　悟
ウ初猟に髭すっぱりと剃るならん　同
脚の長さが抜群の彼　文
渡されし鍵にいまさら慌てゐる　淳
郵便受につまるDM　文
我元帥逝去に哭ける民の性　同
チャンネル変えて宇宙交信　治
月光の雪野あまねく照しをり　淳
咳ひとつ男去りゆく　同
サーキットレースに熱きドラマ果て　悟
あれは経験これは体験　治
お遍路の肩に散りゐる花吹雪　同
川の向ふに宇凧揚りぬ　悟
ナオ春暑し馬駆けぬけるロケ現場　同
銃をかまへてまっすぐに行け　淳
「おかあさん！おやつちゃうだいおかあさん」　文
高層階を染める夕焼　悟
ヴェランダをビアガーデンにしつらへて　淳
税金逃れ上手くいったり　治
真向法真一文字に口を締め　悟
起きれば戻る乳房ふくよか　治
色狂ひ質に家宝の備前壺　文
酢につけおきし蛸のなくなる　悟
難民の仮設天幕月の射す　同
メッカ遥拝済すやや寒　文
ナウ草厳死カードを秘めて紅葉狩　治
隼人の名前愛しむ父　同
へぼ将棋傍目八目多すぎる　淳
麺麭屑拾ふ小鳩二三羽　同
花満てり草々は花ちらほらと　篤
物見遊山かメーデーの列　文

首尾　平成六年七月二十日
於　深川芭蕉記念館

江戸囃子の巻　岩井　啓子　捌

江戸囃子独り稽古の大暑かな　啓子
そよりともせぬ萍の池　水壺
インターの名物鰻香の立ちて　和子
硬貨を握り探す自販機　道子
宵闇のあれは火星か木星か　紀子
蓑虫さげて帰る幼ら　達子
ウ国体にシニア部で出る人の列　和
着やせのたちとしりしあのとき　達
針三本のますのみます誓ふ奴　和
尖塔すいと横切りし鳥　道
チベットの巡礼伏せる土白し　紀
オモニ譲りの布子綿入　同
やめられぬ酒で揺れゐる寒の月　和
また取り出す凶のおみくじ　壺
コロネーション由緒ある鐘鳴らさるる　達
並木通りに客待ちの馬車　道
満開の花挨拶に露天風呂　達
来し方も春行く方も春　壺
ナオ山繭のありど誰にもさとらせず　道
灰をふるひておやき焼け頃　同
無重力宇宙パーティーたけなはに　達
目高の学校はづれっこあり　和
どう見ても解せぬ水着の前後　壺
凝脂で玉をはじく楊貴妃　和
覗いてる天井裏の吸血鬼　紀
コンピューターで二一天作　壺
ボーナスはタレント画家の絵に消えぬ　紀
夢診断の示す躁鬱　啓
雪霽れて満月に玻璃煌々と　道
梁山泊を渡るかりがね　壺
ナウ鳴子守る婆のおもかげ浮かびきて　和
漫画でつづる自分史もよし　道
箱ティッシュみんな持ってる特売デー　達
ボランティアには床屋まねごと　紀
日系の留学生に散りし花　啓
面小手はづす縁のうららか　壺

首尾　平成六年七月二十日
於　深川芭蕉記念館

炎昼の巻　中川　哲　捌

炎昼や原稿未だ手につかず　哲
耳を澄せば響く初蝉　郁子
海底を水中カメラ写すらん　利香
散歩の親子追ひつ追はれつ　光子
町内を隈なく照らす望の月　一恵
野分の跡を照らす白壁　冨美
ウ到来の松茸そっと取り出して　良彌
ワインの銘柄選び歓談　光
君と僕趣味も嗜好も一緒なの　恵
揺れる洋燈開く秘画帳　哲
木星と水星のショーつぎつぎに　郁
極大無限弥勒黙考　彌
冬帽子ときにま深くひとり旅　光
月まだ残り猪狩の衆　利
ピストルはアメリカ流の個人主義　彌
コーラの味にみんな顔染んで　美
花吹雪ゆっくりと押す乳母車　同
都踊の囃子きこゆる　恵
ナオ弁慶と牛若動かざるのどか　郁
落っこっちゃった俎の鯉　光
友達は昔特高今マルサ　恵
無関係だとデカンショデカンショ　郁
鬼一口喰うてみんと裂ける口　利
余呉のさざ波飛ぶ雪蛍　光
年上のあつき抱擁忘れ兼ね　彌
立膝で間夫待つ暦算　恵
イチローは四割打ってヒーローよ　光
懐かしき祖母夢は正夢　恵
雁渡る故郷の山月昇り　郁
食卓豊か酸橘味はふ　彌
ナウ主席逝き南北の壁そぞろ寒　郁
神苑の奥つづく玉砂利　美
分別のごみも綺麗に包まれて　利
嘲のなかいつかうたたね　彌
吟醸酒ほろ酔ひ気味に花衣　哲
もゆるかげろふ園児らの列　美

首尾　平成六年七月二十日
於　深川芭蕉記念館

炎帝の巻　大窪 瑞枝 捌

ジュピターに炎帝放つ星つぶて　瑞枝
梅雨雷を払ふ弦月　弘子
裸んぼ盥の水にはしゃぐらん　淑代
チーズ糸引くピザをぱくつく　路子
キャンパスにずらりと並ぶ外国車　豊美
故郷の訛とれしこの頃　和弥
ゥ久闊の「菊姫」の燗熱くして　和
胸に愛しむ髪の冷たさ　豊
迷ひ込むベルサイユ宮殿鏡の間　淑
カウチの側に座るボルゾイ　弘
殺人の絵解いよいよ始まりぬ　豊
施餓鬼の宵は擯ふ親族　同
月仄か白砂に浮ける石の影　和
秋の蚊柱消える足元　淑
ボール落ちかごめかごめの輪がほどけ　路
ぐみキャンディをつめるポケット　淑
瀬戸内に花の小島の列なりて　同
銀輪を駆る東風の大橋　弘
ナオ弥生尽旅の便りを散らし書き　路
所信表明何かうやむや　路
口中に卵含むか念仏鯛　和
図鑑拡げる食卓の隅　路
過電流理性のヒューズとばされて　淑
魔女にんまりと撫でる薄髯　路
咳ばらひ妻が宇宙を飛んで居る　和
プルトップ缶どうも開かない　弘
銭湯も健康器械備へつけ　淑
路地に散り敷く木犀の屑　豊
弊衣破帽月の逍遙果てもなし　路
爽籟に賦す少年の夢　同
山峡に神楽囃のよく響き　和
ペットボトルで名水を売る　弘
台本をちょっと手直しロケの暇　同
ごまだら蝶の重たげに翔ち　路
百歳の花に違ひけり小倉遊亀　瑞
織部の碗を拭ふ炉塞　和

首尾　平成六年七月二十日
於　深川芭蕉記念館

キャンプの巻　中田 あかり 捌

太き杭キャンプに湖の風抜けぬ　あかり
ほのかに匂ふ草むらの百合　志げ子
白玉を盛りつける手のかろやかに　遊
琴かなでれば尻尾振る猫　政志
雲霽れて十日の月の見え初むる　澄子
パソコン通信送る夜学子　ゑみこ
ゥ送行に袂分たん西東　志
北鮮民衆叫ぶ「哀号」　澄
パトカーの婦警の腰のブローニング　遊
妻の弁当食べた振する　こ
友語る恋愛ごっこ摩訶不思議　澄
木星衝突日時ぴったり　志
荒鷲のまだ人慣れず昼の月　こ
深爪が癖いつも癒　遊
リフォームの注文多く嫌はれて　政
「賢治朗読」訛役立ち　志
農場を横切り万朶の花を浴び　政
スプリンクラー春の虹生む　遊
ナオヨーイヤサ都踊の浮々と　澄
千本鳥居数へ損ねる　政
かくれんぼ遊ぶ子供のきりもなく　遊
長寿眉毛の総理大臣　同
舳までいなだかんぱち満載し　澄
実演販売試す切味　こ
ボンボンの甘いシロップちゅっと出る　遊
ふたつあってもパパにやらない　志
何もかも棚上げになる闇の内　政
此処だけ濡らし通り雨過ぎ　同
南京路中秋節に吊る提灯　同
ピエロの描く泪身に入む　志
ナろおらが村駅の温泉はしり蕎麦　遊
酒におはこの戯れ唄がでて　こ
次の球ポケットにありサーブ打ち　政
原稿用紙の上を飛ぶ蝶　こ
山陵の帝は花に笑み給ふ　同
朝寝とろとろ夢のさめ際　り
　　澄

首尾　平成六年七月二十日
於　深川芭蕉記念館

石筍の巻　原田 千町 捌

石筍にまた一滴の涼気かな　千町
あたりに響く帰省子の声　かりん
早々と縁台将棋始まりて　杉亭
尻尾だけ振る犬の挨拶　冬乃
しろがねの月の芒を折りとりぬ　清子
書類鞄にしまふ秋扇　啓世
ゥ盆波の寄する港に豪華船　乃
眉根りりしき二等機関士　亭
ニューハーフ恋の履歴で売り出せり　子
秘伝の薬味隠し包丁　ん
値を聞いて呆れる登山人の皿　世
丸・竹・爽に冴え渡る月　乃
嘘し夜の明けるまで機を織る　ん
夢工場を潰すニッサン　亭
この匂ひ隣は何をするひとぞ　世
懐紙に書きて即興の詩　子
幹黒々大樹に宿る花の精　亭
ひらと翔びたつ変身の蝶　町
ナオどんたくに家業忘れしのぼせもん　子
回覧板を門に差し込む　乃
発掘の古鏡に彫りし文字うすく　子
釣りし魚で友と酌む酒　亭
恥っかきの子供もやっと九九覚え　ん
今更なんで夫婦別姓　亭
ジャカルタの睡蓮を見に誘ひ出し　世
ボロブドールの半ば朽ちたり　亭
あるがまま融通無碍に無一物　町
山椒の実をぽっつりと噛み　乃
月浴ぶる背をかすめて帰燕とぶ　世
サイクリングはさやけさの中　子
ナろセーターの釦をいつも掛け違ふ　ん
また買って来る呆け除けの本　子
御社はうしろに丸き山を負ひ　世
能の舞台をつつむ陽炎　乃
花に佇ち花の外なる思ひなし　町
陸行水行春を訪ふ旅　ん

首尾　平成六年七月二十日
於　深川芭蕉記念館

古き妻の巻　若尾 よしえ 捌

新宅に入るや訪ひける古き妻　よしえ
夏萩こぼる敷石の上　淑子
登山靴並べ売り居り道端に　雅代
ポンポン菓子の音に驚く　壽子
宇宙船今宵の月は如何ならん　麻子
平均寿命のびてやや寒　好敏
ゥ落蝋は目の下二尺釣り自慢　代
すったもんだの恋の成り行き　壽
名のみなる妻の座ちょっと危うくて　麻
かくれん坊の鬼の泣き出す　淑
神護寺の森うっそうと大鴉　代
火の番小屋で酌み交はす酒　敏
凍て月に観光客はプロバンス　同
からくり人形出ては引っ込む　代
閣僚の名前覚える暇もなし　淑
ソプラノ響く議長土井さん　敏
佇ちつくす分教場の花吹雪　壽
野性のままの仔馬親馬　敏
ナオ春スキー何時もの友と夜行バス　麻
吸はせて下さい煙草一服　淑
刺青は倭建命の勇姿なり　敏
冷水摩擦に励む父親　代
無線機を頼りに海峡横断す　同
金比羅さんのお守りを下げ　麻
髭も好き短足もよしお年頃　壽
ぴたり寄せくる胸のふくよか　代
サーカスの去り行く町は人気なく　敏
痛風故に残る団長　麻
割ってみる西瓜泥棒月を避け　淑
疎開の昔偲ぶ虫の音　代
ナろ秋団扇猫とテノビを見るソファー　麻
ぼけと突っ込み息もつかせず　代
ぼちぼちと増える気配の消費税　敏
針の供養にねんごろな祖母　麻
満開の花の下にて昼の宴　え
埜遊びあとの濃ゆきコーヒー　壽

首尾　平成六年七月二十日
於　深川芭蕉記念館

乱歩と連句

村山 加津江

今年は、江戸川乱歩生誕百年。

昭和生まれの少年なら、一度は乱歩熱にうかれて『少年探偵団』シリーズや『怪人二十面相』シリーズを読みあさったことだろう。かくいう私も少女だった？年前、学校図書で読みあさったものだ。何年か後、もう一つの乱歩の世界を知り、再び乱歩にハマってしまった。

そして、今年。大正末から昭和初期に春陽堂書店から刊行されたシリーズの完全復刻版と、同じく東京創元社の復刻版で棟方志功の版画の挿絵入り『犯罪幻想』をついつい買ってしまった。長編も読み直した。本だけではない。映画『屋根裏の散歩者』『押絵と旅する男』『ＲＡＭＰＯ』や、美輪明宏主演の舞台『黒蜥蜴』も観に行った。

乱歩自身の作品だけではなく、今年第七回山本周五郎賞を受賞した『一九三四年冬－乱歩』（集英社・著者の久世光彦氏の作品はオススメです）や、松山巌著『乱歩と東京』（パルコ出版）など、関連ものまで読むという熱の入れよう。

生来、浮かれやすいたちなのだが、本当にブームに浮かれてしまった。

さて、こんなふうに、乱歩を乱読しているうちに、非常に興味深いものを発見（少々大袈裟か？）した。乱歩が自伝的エッセイ『わが夢と真実』（東京創元社）の中で登場させている、乱歩自身と、『男色文献書志』の著者岩田準一とによる「衆道歌仙」である。その説明を一部抜粋すると、

文反故の中に「衆道歌仙」という妙なものが混じっていた。やはり、その頃、芭蕉七部集から入って、古俳諧や古川柳に興味を持った名残りである。これまた甚しくブロークンで、もとより連句の体をなしてないが、（後略）

とある。付合を紹介してみよう。

青葉して細うなられし若衆かな　乱
夜な〳〵蛙きいて伽する　準
道中は御葛籠馬で乗り掛けて　乱
村の舞台に匂ふ前髪　準
袖笠に落ち行く月の野中道　乱
女郎花には裾もぬらさじ　準
時節待つ念者も酌むか菊の酒　乱
麻呂は旅寝の露をかたしく　乱
うちかくる皮癬の股の小柄疵　準
指買ふ嘘の恋はさめ果て　乱
寺の名も朽ちて惱髏のひとり棲み　準
おどろの闇に冴ゆる振袖　乱
若契の声二いろになまめきて　乱

－以下略－

また、連句の後に、こうも書いている。

衆道を連句の中に一二カ所取入れることは、芭蕉前後の作品には、ほとんど仕来りのようになっていた。

もし、自分が連句を知らなかったら、きっと見過ごしてしまった部分だろう。あの乱歩が連句を…と、なんだか身近に感じ嬉しくもなった。また、黒岩涙香著の『小野小町伝』（現代教養文庫）などをみるにつけても、昔の推理小説家たちの教養の深さをいまさらながらに知る思いがした。

とはいうものの、連句を始めて時間だけはたつが、いまだに入門書と首っ引きの私には、正直いって本当のおもしろさはよくわからない。

みなさんは、どう評価されるだろうか。

わたしの連句「入門」

おおたけんのすけ

連句に触れたのは、岩波の「図書」に載った歌仙でした。しかし読んだ当座の記憶は微かです。そういえばと思ったのは、それから十五年あまりも経っていた八十年代の終わり頃でしょう。福武の「五音と七音の詩学」に、『新酒の巻』として他の評論などと併せて収められていたのを、みつけたときでした。

鳴る音にまづ心澄む新酒かな　爽斎
木戸のきしりを馳走する秋　流火
月よしと訛うれしき村に入り　信
どこの縁にも柳散る朝　才一

ただ、この歌仙に興をそそられたのではありません。連衆の顔ぶれが、生意気ながら好みだったのです。その小説に夢中という時期もありましたが、それよりも「森鷗外」「諸国奇人伝」から「爽斎饒舌」など評論の石川淳。脇の流火。戦後の五・三〇事件を、詩集「六月のみどりの夜は」の中に刻んだ安東次男については、「蕪村」「古句再見」を読み、「流火艸堂句集」も見かけていました。そしてその詩よりも、延々たる詩論でもある「折々のうた」の短評が好きな大岡信。最後に、その小説・翻訳はともかく、「文章読本」などの評論「日本語で一番大切なもの」等の対談が、なかなかと思える丸谷才一、という顔ぶれだったのです。

やがて「浅酌歌仙」「とくとく歌仙」と読み続き、安東次男「風狂始末」シリーズに到って、これが意外にも読み辛く中途で止めました。ならばと、露伴「七部集評釈」を所々斜め読みしても難解。まだわかり易いのが柳田国男「俳諧評釈」ではありましたが――。その頃でした。矢崎藍「連句恋々」を読み、またＡＣＣの「連句入門」講座を知ったのは。

§ § § § § § §

◇ 猫養発展基金ご協力感謝いたします。

一万円　原田千町　梅田利子　山崎一恵
八角澄子　瀧川雅代　（敬称略）

◇ 富士銀行新宿西口支店
普通 3376045（猫養基金）

＊連句とさかな＊

鯊

杉江 杉亭

江戸川べり、羽田沖では鯊釣りの季節を迎えようとしている。

筆者も少年の頃、よく郷里の突堤で鯊釣りを試みた。餌は沙蚕（ごかい）である。当時の海は透明度が高く凪いだ日など海底まで見通せる程である。

餌をつけた釣糸を海底まで垂らすと早速石陰からぎんぽうが餌をつつく。それを避けて砂地の保護色をした鯊がお目当てである。漸く見つけて鯊の口先を餌の付いた鉤でつつくと、最初うるさげにしていた鯊が鉤を飲み込む。充分飲み込んだところで竿を引くと、鯊は力の限り後退しようとする。この釣りの醍醐味を清喫して釣果一尾となる。その釣場も今は護岸工事で見る影もなくなった。古き良き時代の思いでの一齣である。

質問コーナー

東　明雅

【Q】　ＡＣＣの教室では、皆さんが捌きができるようにご指導いただいておりますが、捌きの役割と意義、又捌きとして座るとき何が大事かについてお教えください。

（佐藤　良彌）

【Ａ】　捌き手（宗匠）は、よくオーケストラの指揮者にたとえられるが、私はむしろ、海図もない未知の地へ向かって船出した船長に似ていると思う。

オーケストラには既に楽譜があるので、指揮者はそれに従ってタクトを振り、各楽師がそれぞれの楽器をいかにうまく扱って楽譜通りの音を出すか、それをチェックすれば、演奏の成功は保障されている。それに対して海図のない船長は、あらゆる彼の知識・経験・カン・情報を駆使して、船中の各員がそれぞれの任務を忠実に果たすように注意しながら、船を進めなければならない。目的の地に無事辿りつくか否か分らない。それだけに未知の国へついた時のよろこび・感激は一入であろう。

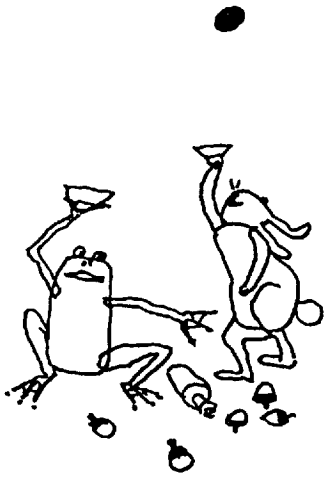
俳諧にも、楽譜や海図に似たものはない。捌き手は前途の保障は何もないままに、一座の連衆を指導して作品を創り上げて行かねばならない。それには一巻全体の構成を考えて、それに従って連衆の作って提出する一句一句を吟味・添削しながら、時には自分も出句して進めてゆく。だから俳諧の方式や故実に通じているだけでは不十分で、ある時は連衆を鼓舞し、あるいは落ちつかせ、時には暗示し、時には直接要求して変化に富んで、おもしろく、しかも調和の取れた新しい一巻を纏め上げねばならない。

このように、捌くということは大変難しいことであるが、見事、一巻を捌き得た時のよろこび満足感は格別である。私はクラス全体の方々に早くこの満足感を味わっていただきたいと思って、初心のうちから捌きの練習をさせている。そしてこれが俳諧（連句）熟達に到る最も早道だと考えている。

捌き手も船長も、それぞれの場所においては絶大の権力を持っている。連衆の句を採用するか否か、それをどう添削するかはすべて捌き手の一存であり、連衆はそれに従わねばならぬ。それは船長が、その船の中でオールマイティであり、極端に言えば船中全員の生殺与奪の権を握っているのにも似ている。

私の師匠芦丈先生は、捌きの席に着く時の覚悟を「和歌三神を背に負うているというつもりでやりなさい」とさとされた。和歌三神とは和歌を守る三柱の神で、いろいろ異説があるが、住吉明神・天満天神・玉津島神などを指す場合が多い。今日正式俳諧の席で天満天神の名号をかかげるのも、その意味であろう。要するに神にちかって依怙贔屓なく、よい句があったら必ず採用せよという意味であろう。

ただ、そのことも大切であるけれども、私は座の文学たる連句である以上、一座の和を破らぬよう細心の注意も肝要だと思う。



高橋　香吟

杉内　徒司

都心連句会（会場・農林中金目黒寮）に初めて参加したのは昭和四三年十二月二日。暫くは戸惑っていたが、翌年になると、捌きの牛耳さんや会員の方々とも大分親しくなった。

「香吟さんは達者で旧派の御手本みたいなんだが、本を読まないから句が古い」（牛耳）と蔭で云われていた香吟さんに、一度遊びに来ませんかと誘われた。

香吟さんは寡黙な方だったが、新米の私に親切にして下さり、いつしか私も好意をもっていたので六月例会のあとお訪ねした。

香吟さんは青梅の酒屋さん・奥さんに店番を頼み、近所の居酒屋へ案内され、私の質問にいろいろとお教え下さった。

香吟は連句を茂木秋香に習った。秋香は深谷市矢島の産、大地主、昭和十六年十二月三十日没。七九歳。根津芦丈も兄事していた大家で、門下も多く、中にも戦後埼玉県会議長を勤めた寄居の石沢無腸は高名。因みに無腸は晩年啐啄会を主宰したが、その高足が森三郎である。

香吟の奥さんは演中調布の娘さんだという。調布の歌仙は天野雨山編の『昭和連句總覧』（昭和八年刊）に収録されている。演中家は代々八王子の同心、千本槍の家柄で、明治維新後、次男が同僚天野家に養子となったが、その養子こそ大正期に活躍した俳諧師天野暁賀であり、暁賀の子が雨山である。

こういう俳諧的環境をもつ酒屋の若旦那香吟は極自然に俳諧にのめり込んで行き、商売をなおざりにするのを見兼ねた調布に「連句道楽はほどほどにしろよ」と何回も諭されたそうだ。「しかし商売は有難いもので、あの昭和の初めの不景気も何とか乗り越えてきました」。

香吟は三多摩地方の風交のある左記の方々について動静を詳しく話してくれた。

久保呼山　黒川桑風　橋本蘭蛍　井草麥雅　森田殷史　坂本素若　村野秀一　田中華泉　抱一庵鬼木　野村黙鍬子　松丸騎天洲など。

このお蔭でその後私は都下の旧派の宗匠の方々と付合うようになった。

香吟さんは『草上の虹』（昭和四十年十二月刊）をみて都心連句会会員になった方だから、それ以降の都心連句の刊行物に作品が沢山のっている。明治三六年四月生、昭和五十九年一月二日没。

編集部より

○　記録的な暑さでした。アスファルトで覆われた都会の暮しには、ちょっと別種の季寄せがいるのではとさえ思いました。

○　十月十一日、行々子庵杉亭宗匠が永眠されました。連句と酒を愛され、新人にも親切な指導をしておられた故人に、告別式で明雅先生は「杉亭さん」と話しかけられるように弔辞を述べられた。

明日よりは誰とか酌まん今年酒　明雅

○　十月十五日。成蹊大学で国際連句コロキアム開催。明雅先生もご講演。外国人のパネリスト、参加者もあり、連句の新しい可能性について、活発な意見交換があった。

季刊「ねこみの」通信　第十七号
発行者　猫蓑連句会
印刷所　アトリエ・Ｎｅｋｏ